

富山の四季

秋

根 来 尚

秋は変化の季節です。生命がいきいきとした活動を示す夏から、雪の中でのきびしい冬越しへの大きな変化。その変化の中に、自然のあざやかな彩りがちりばめられます。紅葉は9月の立山に始まり、山を下りて来ます。立山が新雪で被われるころ、平地でも冷気を感じるようになり秋も盛りとなります。移動性高気圧におおわれた青空の下、平地の木々も紅葉が始まり、木や草は実を結び、キノコはかさを広げます。動物や野鳥は木の実をたっぷりと食べ、長く寒い冬にそなえます。

秋の気象

秋の始めのころは、秋雨前線が北方より下りてきて本州付近に停滞するようになり、秋の長雨となります。秋は台風のシーズンでもあります。富山ではあまり大きな影響はないようです。大陸の高気圧がしだいに発達し、太平洋高気圧が後退すると、秋雨前線は南方へと下がり、大陸の高気圧の一部が移動性高気圧となって日本を通過してゆきます。この高気圧に被われると、秋晴れとな



図1. アキグミの実

り、空は青く澄みわたります。美しい夕焼けが見られるのもこの季節です。

秋のみのり

コナラやミズナラのドングリ。すずなりのブナの実。真っ赤に色づくナナカマドやイイギリ・アキグミなどの実。エノコログサやチカラシバ・イヌタデなど道ばたの草にも実がつきます。春・夏と栄養をたくわえた植物は、それを種子へとみのらせます。秋はみのりの季節です。



図2. 「秋」の展示パネル・ジオラマ



図3. タマゴタケ

大地に根をおろした植物は、種をまきちらすことで、新しい場所に新しく仲間を増やすことができます。目だつ色をした木の実、鳥やけものに食べられ、種はフンとしてまきちらされます。いろんな動物の体にくっつき、あちこちへ運ばれるものもあります。イノコズチやアメリカセンダングサ・オオオナモミのようにカギでくっつくもの、メナモミやチヂミザサのようにねばりけのある物質でくっついていくものなど、“ひつつきむし”と呼んで子供たちはこれらで遊んだりします。また、ツリフネソウのように、ポンとはじけて自分で飛び出すもの、タンポポやダンドボロギクのように、綿毛を広げ風に運ばれていくものなど、植物はさまざまな方法で種をちらせます。新たな土地で、種は冬を越し、春には芽をふき、新たな植物の一生が始まります。

森の地面ではさまざまな菌類（カビやキノコの仲間）が菌糸を張りめぐらしています。菌類は、落葉や枯れ木などから養分をとり、それらを土にもどす働きの一部をうけています。キノコは胞子を作るところで、菌の花ともいえるところです。秋はキノコの季節でもあります。春の山菜とならんで、秋のキノコは野山から得られる味覚の代表的なものです。マツタケ・マイタケ・エノキダケなどなど。一方、ドクササコ・イッポンシメジなどの毒キノコもいろいろあり、キノコを食べる時には注意が必要です。

冬越しの準備

寒く、エサも少なくなる冬をのりこえるため、動物は移動し、エサをたらふく食べ、またエサをかくし、越冬場所をさがします。代表的な渡り鳥シギやチドリは、シベリアでの繁殖を終えると、



図4. セイタカシギ



図5. クマだな

冬を南方ですごすため大きな移動をします。その途中、日本を通過し、秋の干潟や海岸で多くのシギやチドリを見ることができます。クマは冬眠に入る前にブナやミズナラなどいろんな木の実をたらふく食べます。クマが枝を折って木の実を食べた跡を“クマだな”と呼んでいます。カケスやヤマガラは木の実をかくして蓄わえておきます。テントウムシやカメムシは、良い越冬場所をさがし集まってきます。

一方、移動できない木々は、種をちらし、葉を落とし、りんぺんや毛でおおわれた寒さに強い冬芽を枝先につけて冬にそなえています。

生き物によって、冬を越すためのさまざまな工夫がみられます。

紅葉・落葉・冬芽の準備、木の実や草の実、胞子をちらすキノコ、そして、これらをエサとする動物たち。これらの生命のいとなみは、全てきびしい冬をいかにすごし、春に生命をつなげてゆかにつながるのです。

(ねごろ ひさし 昆虫担当)